四月にこの目白校舎に引っ越しをしてきてから、気がつけばもう七月。十三日の終業礼拝まで、ラストスパートです。

六月中の話となりますが、東京都保健医療局は、デング熱等、蚊が媒介する感染症の発生を抑えるために、蚊の発生防止対策が重要である。それを周知するため、蚊の発生シーズン前の六月一日から六月三十日までを「蚊の発生防止強化月間」と定め、啓発キャンペーンを実施。この期間中、都バスなどは、ラッピングバスを走らせ、視覚的に蚊の発生防止を呼びかけていたようです。

二〇一四年、日本では約七十年ぶりとなるデング熱の国内発生が確認されました。二〇一六年二月には、ジカウイルス感染症が四類感染症に追加されました。デング熱もジカウイルス感染症も、ウイルスを保有する蚊に刺されることで発症する感染症です。主な媒介蚊はヒトスジシマカ。

デング熱の症状は、ウイルスを持った蚊に刺されて三～七日後に高熱が出て、頭痛がしたり、目の奥に痛みを感じたり、関節や筋肉が痛くなったりします。そして感染の後期には、皮膚に発疹が広がり、正常部が白い島状に見えるようになるのが特徴なのだそうです。

ジカウイルス感染症もデング熱と似た症状が出るようですが、デング熱よりも軽症で、多くの人は二～七日ほどで回復するようです。

世界で、年間七十万人以上の命を奪っている蚊。「人類最大の敵」とも呼ばれています。

人間の血を吸いに来るのはメスの蚊。メスの蚊は、卵を発育させるために吸血しますが、メスもオスも生きていくためにはエネルギー源が必要で、それは花の蜜や樹液から得ています。メスはお腹の中に血液が入る袋と蜜が入る袋とが別々にあり、人間並みに「甘いものは別腹。」になっているようです。

蚊の口吻（こうふん）と呼ばれる口というか針の部分は、非常に精巧に作られていて、一見すると約二ミリの一本の針に見えますが、実は七本の針（一本の上唇（じょうしん）と一本の下咽頭（かいんとう）、二本の大顎（だいがく）と二本の小顎（しょうがく）、一本の下唇（かしん））から構成されています。吸血の時には、下唇が「く」の字にたわんで皮膚上に残り、上唇・大顎・下咽頭・小顎の合計六本からなる刺針部だけが刺し込まれます。

ストローのように血液を吸う役割は、刺針部の中の上唇が行います。上唇の直径は、０．０３ミリ（ちなみに人の髪の毛の太さは約０．１ミリ）。

この上唇が大顎二本と下咽頭に支えられて一本の管のようになり、この管を二本の小顎が両側からはさみ、四本からなる管と小顎二本を交互に出し入れしながら、管がスムーズに皮膚に入るように誘導。小顎の直径は０．０１５ミリの細さ。先端はのこぎりの歯のようにギザギザの形をしているため、動物が痛く感じないように上手に皮膚を切り裂けるのだとか。上唇と下咽頭の先端はナイフのように鋭くとがり、皮膚に挿入された四本の管で素早く血管を探し、上唇から吸血します。下咽頭の真ん中には唾液管が通っていて、吸血に先立ち唾液を注入。唾液は毎秒六回の速さで断続的に注入されます。この唾液中に局所麻酔物質・消化液・血液凝固抑制剤などが含まれ、麻酔物質の効果は約三分間持続します。

血液凝固抑制剤で血液が固まる時間を遅らせ、極細の上唇が詰まらぬように、消化液を使って血液を消化吸収しながら、効率よく吸血します。蚊に刺された後にかゆくなるのは、これらの異物のタンパク質である唾液成分が、アレルギー反応を起こすからだそうです。

これらの知識は『きっと誰かに教えたくなる　蚊学入門』一盛和世編著　緑書房　から得ました。蚊、恐るべし！地球の温暖化が進み、蚊の生息地域や期間がますます広がる可能性が高そうです。昨今の異常な暑さのため、蚊の発生時期が、秋口にずれ込むようなことも出ているようです。しかしながら、異常気象の大元を作り出しているのは、かの人間。蚊は、蚊の鳴くような声で、「かなわんなぁ。」と、つぶやいているのかもしれません。

（立教小学校校長　田代　正行）